

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24760516

研究課題名(和文)近隣文化圏との建築技術交流にみるアナトリアの中世期イスラーム墓廟建築の史的展開

研究課題名(英文)Historical Development of Islamic Mausolea in the Middle Age of Anatolia under the Prospect on Interactive Building-Technique with Neighboring Cultural Areas

研究代表者

守田 正志(MORITA, Masashi)

東京工業大学・総合理工学研究科(研究院)・特別研究員

研究者番号：90532820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、12世紀から15世紀初期にかけて建設されたトルコ共和国内のイスラーム墓廟建築を対象に、5回の現地調査を通して110棟以上の墓廟の現状を把握するとともに、詳細な画像データや実測データを得た。

得られたデータを用いて、各遺構の所在地域や創建年代を考慮し、墓廟建築の内部構成・外部構成・装飾形式の地域的・時代的特性を明らかにした。

さらに、建築技術的側面から同地域のキリスト教建築との比較を通して、墓廟建築の展開に関するいくつかの系譜の存在を指摘し、墓廟建築のもつ歴史建築としての評価を明確にし、中世アナトリアにおける建築文化の潮流の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The subject of this study is Islamic mausolea built from the 12th to the early 15th centuries in Turkey. Through the five field surveys, the present conditions of more than 110 mausolea were precisely recorded and their image and measured data were obtained.

By using acquired data, the regional and chronological characteristics of the internal composition, external composition, and ornamental style of mausolea were clarified considering location and construction date of each mausoleum.

In addition, the several genealogies concerning to a historical development of mausolea in Turkey, were pointed out by comparing to Christian architecture in the same area from the viewpoint of architectural technique. As the result, the evaluation as a historical architecture possessed by mausolea in Turkey was made clear, and a part of current of architectural culture in Anatolia was clarified.

研究分野：建築史

キーワード：アナトリア 中世 イスラーム 墓廟 建築技術 建築構成 トルコ

1. 研究開始当初の背景

トルコは、古くはアナトリアと呼ばれ、多様な建築文化が開花した。その一つに、11世紀以降、中央アジアやイランから伝播したイスラーム建築文化(アナトリア・セルジューク建築、オスマン建築)がある。一方、イスラーム建築に先行し、ビザンツ、アルメニアおよびグルジアのキリスト教建築文化が繁栄していた。この歴史的背景を踏まえると、中世のアナトリアにおいて新興のイスラーム建築を研究することは、異文化間での建築技術の伝播・受容・展開の解明に連動する。例えば、中央アジアやイランのイスラーム建築は主にレンガ造である。一方、先行するキリスト教建築において石造の遺構が現存するトルコでは、石造のイスラーム建築も少なくない。この事実から、アナトリアにおけるイスラーム建築は、先行するキリスト教建築に用いられた建築技術を援用して建設されたものと予想される。

こうしたアナトリア・セルジューク建築における代表的な一類型に、墓廟建築が挙げられる。墓廟は聖者を祀るほか、為政者や有力者が自身の権力誇示のために建設した。そのため、宗教建築に比べ厳格な宗教的規範に束縛されず、当時の建築技術や装飾芸術の粋を集約して建設されたものと推察される。こうした墓廟はトルコ各地に建造され、12～15世紀初期創建のものに限っても150棟以上現存する。その数は、同時代のモスクやマドラサなどの主要遺構と比べて格段に多く、建築構成、装飾形式は多岐に亘るため、墓廟建築は同地域の建築の歴史を検討する上で重要な遺構群である。

しかし、アナトリアの墓廟建築に関する既往研究では、典型例と思しき墓廟数棟を事例に、その形態や装飾の美術史的・様式論的検討に終始している。また、一部の研究において、ビザンツ建築などの他文化圏の建築との関連性・影響関係についての言及も認められるが、建築物外観に主眼を置く表層的観点からの類似性を指摘するに留まる。このように、墓廟建築をイスラーム建築の一類型として概説しているに過ぎず、様々な建築文化が根付いたアナトリアに展開した墓廟建築の歴史的評価は、必ずしも明確にはされていない。

2. 研究の目的

本研究は、以上の問題点を踏まえ、アナトリアにおける建築の史的潮流の再編を目的に、申請者が推進してきたトルコ共和国の墓廟建築研究をより深化させ、トルコに現存する12～15世紀初期創建の墓廟建築を対象に、建築内部構成・建築外部構成・装飾形式を含めた建築全体を包括的に検討する。併せて、イスラーム建築の範疇に留まる従来の墓廟建築に対する史的評価を改め、周辺キリスト教文化圏の建築との横断的な比較検討により、多様な建築遺構に通底する建築技術および構成原理を見出し、異文化間での技術交

流が地域の建築の発展に果たした役割を明らかにする。

すなわち、本研究は墓廟建築を起点に建築技術に注目することで、宗教という枠組みを取り除き、地域としての建築の展開を史的に明らかにする新たな研究手法とその成果であり、建築史研究全体における学術的意義は非常に高い。加えて、15世紀中期以降のトルコは、中東からアナトリア、バルカンに至る広大な領域を支配したオスマン朝時代に入り、墓廟建築の特徴でもあるドームにより、内部空間全体を覆うモスクが建設され始める。したがって、建築の技術的側面から墓廟建築を分析する本研究の成果は、オスマン朝期のトルコおよび周辺地域におけるイスラーム建築の展開を通時的に解明していくことにも資する。

3. 研究の方法

本研究では、12世紀から15世紀初期にかけて建てられた墓廟建築について、これまでの研究成果及び調査データに加えて、新規の建築調査で悉皆的に収集するデータを基に分析を行う。具体的には、建築遺構を静止画像ないし動画データとして記録するとともに、平面実測および写真測量を実施する。収集した図面データ、静止画像・動画データを基に、主として以下の項目について整理・分析を行った。

トルコに現存する墓廟建築を網羅的に調査し、遺構の正確な現状記録によるデータベースを作成する。作成したデータベースは、本研究のみならず、今後の保存・修復活動における貴重な資料となる。

多様な墓廟建築を段階的に整理していくため、建物の内部構成・外部構成・装飾形式に分け、ドーム架構や外部部位の構築手法、彫刻装飾の特徴を墓廟の創建年代や所在地域と共に検討し、それぞれの地域・時代特性を明らかにする。

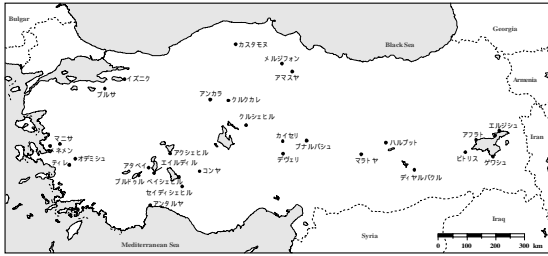
内部構成・外部構成・装飾形式の結果を統合し、墓廟建築全体の系譜を明らかにする。また、建築技術的側面から同地域のキリスト教建築と比較し、墓廟建築のもつ歴史建築としての評価を明確にし、中世アナトリアにおける建築文化潮流の一端を明らかにする。

4. 研究成果

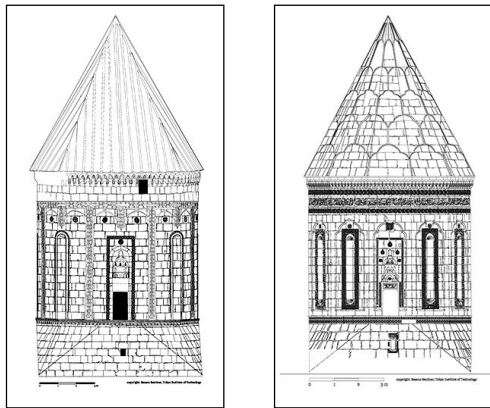
(1) 悉皆調査に基づく墓廟建築の現状把握

研究期間中、トルコ共和国全域を対象に5回の現地調査を実施し、墓廟建築を踏査した。調査した遺構数は110棟を超え、デジタルカメラ・デジタルビデオカメラによる遺構の現状を記録した画像情報を得るとともに、いくつかの遺構については平面実測およびクラボウ社写真測量システム Kuraves を用いた写真測量により実測データを収集し、平面図

および立面図を作成した。また、レーザー距離計を用いて、ドーム高さおよびドーム架構部までの高さ方向の実測も行った。



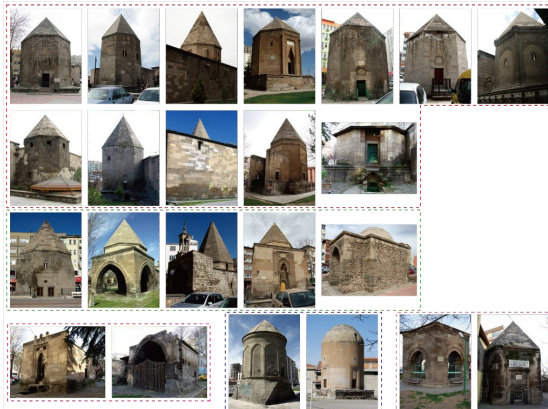
主な調査対象地



実測と写真測量に基づいて作成した立面図の一例

(2) 地域ごとの建築的特長の整理

墓廟建築の系譜を検討する前段階として、調査した遺構の建築的特長について地域ごとに整理した。具体的には、東部（ワン湖周辺）、中央部（カセイリおよびその周辺）、中央北部（アマスヤ、メルジフォン）、南西部（マニサ、オデミシュ、エイルディル、アンタルヤおよびその周辺）に現存する墓廟の創建年代・工法・外部構成・内部構成より遺構を類型化し、各地域・年代特有の建築構成を導出した。整理の際には、調査で得られた新情報や既往研究での誤りの訂正を加味した。また、これまでに詳細な調査報告の無い墓廟については、現地調査で得られたデータを用いて、同地域の他の墓廟と比較し、創建年代の推定を行った。



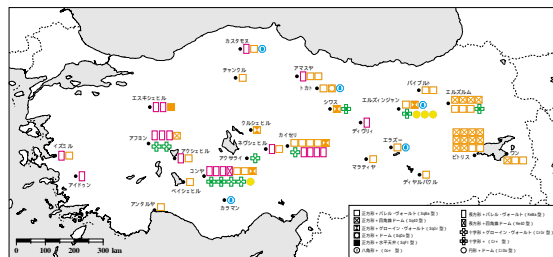
アナトリア中央部の墓廟の類型化

(3) クリプトの構成

アナトリア・セルジューク期の墓廟建築の

構成をみると、一般的に、クリプトと主階部の二層構成であるといわれるが、これまでの現地調査により、クリプトの無い墓廟を多数確認してきた。また、後代のオスマン朝期ではクリプトの無い墓廟が主流となる。クリプトは通常、半地下の空間にヴォールト等を架けた構成をしており、建物の外観上では明確な基壇部を形成する場合もあり、建築全体の構成を規定する上でも、重要な部位の一つである。そこで、アナトリア地域に建てられた墓廟建築のクリプトの有無や、平面形状・架構形式の分類によるクリプトの構成の年代的・地域的傾向を検討し、墓廟建築の建築的特徴の一端を明らかにすることを試みた。

検討の結果、墓廟建設の草創期から、クリプトの有る墓廟、無い墓廟の両形式の存在を確認できた。ただし、クリプトを有する墓廟の建設は、西部では14世紀後半に入ると停滞するのに対し、東部では時代が下っても継続していた。クリプトの構成では、矩形平面にバレル・ヴォールトあるいは四角錐ドームという簡易な構成が92棟中64棟(69.6%)と多用されていた。これは、半地下のクリプトが建物の基部を成す重要な部位であるため、施工上の合理性が求められたことに、その一因があると考えられる。また、使用される構成の地域傾向では、同一の構成が多用される地域や多様な構成が用いられる地域と、アナトリア内でも地域によって異なる傾向を示していた。すなわち、12~15世紀前半の短期間に、多様な種類のクリプトの構成が創出され、地域的な差異をみせながら使用されていた事実は、各地の支配王朝の嗜好性を多分に反映していたことを傍証するものであることを明らかにした。



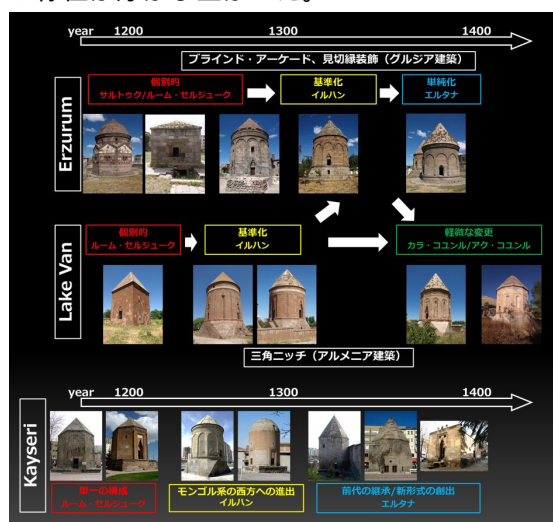
クリプトの構成にみる墓廟の地域分布

(4) 墓廟建築の系譜に関する試論

アナトリア地域の墓廟建築の歴史的展開を解明するために、これまで個別に検討してきた、工法、内部構成、外部構成、装飾形式の結果を統合し、使用材料と架構形式との関係、架構形式の使用位置による外部構成への影響、主階部および屋根部内外の形状の対応関係、彫刻装飾のモチーフと使用位置との関係の時代・地域的傾向から、墓廟の建築形式とその基盤となる建築技術の系譜の作成を試みた。また、ビザンツやアルメニアの教会建築群に用いられた建築技術との影響関係の分析を通して、墓廟建築の構成原理と適用された建築技術に関し、その固有性・他文化との複合性の評価を試みた。

まず、トルコ東部においては、前代のアルメニアやグルジアの教会堂で用いられたラブル・コア工法を継承した石造の墓廟が一貫して建設され続けた。その建築構成をみると、初期には規範となるような建築構成は見出されないものの、モンゴル系イルハン朝のアナトリアへの侵入と時を同じくして、四隅を斜めに切り落とした基壇の採用が始まり、墓廟の外部構成・内部構成が一様となっていく過程がみてとれた。さらに、時間の経過とともに細部意匠や架構の単純化が図られるが、アナトリア北東部のエルズルム周辺と南東部のワン湖周辺では単純化の手法に差異が認められた。一方、中世アナトリアで一大勢力を誇ったルーム・セルジューク朝の首都である、アナトリア中央部のカイセリ周辺では、前代においてビザンツ文化圏下の影響によりレンガを用いた墓廟が多数建設されていた。建築構成についてみると、初期から統一的な墓廟が建設されているものの、イルハン朝の勢力が及ぶとともに東部でみられた四隅を斜めに切り落とした基壇を持つ墓廟の建設や、支配王朝の更なる変化に伴い新たな形式を有す墓廟の建設が認められた。

以上、12世紀以降のイスラームの伝播によって、アナトリアでは墓廟という新たな建築が建設され始めるが、工法としては前代および同時代の周辺キリスト教文化圏で用いられた技術を継承することで、短期間に多数の墓廟の建設を可能とした。しかし、その構成についてみると、地域的なまとまりをみせながら多様な種類が創出され、イスラーム系各王朝の支配領域の伸長や王朝間の交流により、墓廟建築の展開に関し、いくつかの系譜の存在が浮かび上がった。



アナトリアの墓廟建築の系譜

今後の展望としては、アナトリア西部の墓廟を含め、中世アナトリアの墓廟建築の系譜を包括的に解明することが課題である。さらに、研究目的でも述べたように、墓廟建築の特徴の一つであるドームに着目することで、本研究成果を起点として、オスマン朝期のトルコおよび周辺地域におけるイスラーム建

築の展開を通時的に解明していく。また、東地中海地域という対象領域の枠を広げ、同地域に展開したビザンツ・オスマン両帝国下の教会・モスクに代表される東地中海地域のドームを有す建築の内外の包括的な建築構成とその構成を成立させた技術的特質を明らかにし、墓廟建築を含めたドーム建築の架構形式と空間構成の系譜の解明していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

守田正志、アナトリア中央北部メルジフオンおよびカスタモヌにおける 13-15 世紀創建の墓廟建築の調査報告、2014 年度日本建築学会関東支部研報告集、2015 年 3 月、pp.501-504、査読なし

守田正志、トルコ共和国アマスヤ (Amasya) 市内に現存する墓廟 (Anonim Türbe) の創建年代推定、2014 年度日本建築学会大会学術講演梗概集、2014 年、pp.661-662、査読なし

守田正志、トルコ南西部における君侯国期創建の墓廟建築の調査報告、2013 年度日本建築学会関東支部研報告集、2014 年、pp.441-444、査読なし

守田正志、トルコ共和国カイセリ (Kayseri) 市内に残る 12-15 世紀創建のイスラーム墓廟建築の構成：キリスト教・イスラームの文化混淆地域における歴史建築の研究 24、2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊、2013 年、pp.553-554、査読なし

守田正志・篠野志郎・地元孝輔・山中浩明・藤田康仁、ワン湖北東部エルジシュ (Erciş) 市近郊の墓廟建築の調査報告：キリスト教・イスラームの文化混淆地域における歴史建築の研究 21、関東支部審査付き研究報告集、第 8 号、2013 年、pp.153-156、査読あり

守田正志・篠野志郎・藤田康仁、アナトリア地域における 12~15 世紀前半創建の墓廟建築のクリプトに関する研究：キリスト教・イスラームの文化混淆地域における歴史建築の研究 19、関東支部審査付き研究報告集、第 7 号、日本建築学会関東支部、2012 年、pp.149-152、査読あり

藤田康仁・篠野志郎・黒津高之・元結正次郎・高橋宏樹・山中浩明・守田正志・山田卓矢・吉本憲生・服部佐智子、トルコ共和国東部ワン湖周辺における歴史的建築遺構の調査報告：キリスト教・イスラームの文化混淆地域における歴史建築の研究 20、2012 年度

日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊、
2012年9月、pp.459-460、査読なし

〔学会発表〕(計 3 件)

守田正志、アナトリア地域における中世イスラーム墓廟建築の系譜に関する試論、日本建築学会東洋建築史小委員会定例研究会、建築会館(東京都港区)、2014年7月25日

守田正志、中世創建の墓廟建築にみるアナトリア地域のキリスト教・イスラーム建築文化の融合」、地中海学会定例研究会、國學院大学(東京都渋谷区)、2014年2月22日(『地中海学会月報』、No.369、2014年4月)

守田正志、トルコ共和国における中世期創建の墓廟建築の特質～工法・架構構成・クリプト構成を中心に～、中世建築研究会、東海大学(東京都渋谷区)、2013年2月16日

〔図書〕(計 1 件)

Shiro SASANO, Yasuhito Fujita, Masashi MORITA (ed.), Historic Christian and Related Islamic Monuments in Eastern Anatolia and Syria from the Fifth to Fifteenth Centuries A.D. - Architectural Survey in Syria, Armenia, Georgia, and Eastern Turkey、彩流社、2015年、659 p.+1,518 Figs. (分担執筆: Vol.1 Chap.6, Vol.2 Chap.15 Sec.22-56, Vol.2 Chap.17 Sec.5-11, pp.111-124, 455-528, 633-649)

〔その他〕

市民講座による研究成果等の社会還元
守田正志、東トルコ建築探訪 - キリスト教・イスラーム建築文化の融合 -、第113回とぶかぶサロン、主催:日本トルコ文化協会、会場:京都大学、2013年

ミニ・シンポジウムによる研究成果等の社会還元
守田正志、東アナトリアにおける12～15世紀創建の墓廟建築の特質:エルズルム及びワン湖周辺地域の墓廟の比較を通して、科学研究費海外学術調査報告会:越境するローカリズム シリア・アルメニア・東トルコ・グルジアの歴史建築、東京工業大学、2013年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守田 正志 (MORITA, Masashi)
東京工業大学・大学院総合理工学研究科・特別研究員
研究者番号: 90532820